

(3) 「読む」ことのつまずき

私たちは本や新聞などを読むとき、その文字や行に焦点を当てて読んでいきます。視覚認知⁵に困難さがあるLD児の場合、焦点を当てるのが難しく、正確に読み取ることができません。

そのため、

- たどたどしい読み方になってしまう。
- 文字や行をとばして読んでしまう。

などの様子がみられます。

また、細部まで焦点を当てたり集中したりすることが難しいので、

- よく似た文字を読み間違ふ。(例 ね⇔わ⇔れ、く⇔し⇔つ)
- 促音(例 きって、ねっこ)、拗音(例 いしゃ、きゅうり)
長音(例 おかあさん、こおり)を正しく音読できない。

などの様子もみられます。

これらはすべて、視覚認知の困難さから生じるつまずきであって、視力障害によるものではありません。

5 視覚認知...目で見えたものを形や色などでとらえて、判断したり識別したり意味付けしたりすること。

視覚認知における混乱



重なると見分けられない

(4) 「書く」ことのつまずき

文字を書く、絵を描くなどのように、書く(描く)ことは、視覚認知と空間認知⁶に関係があります。空間認知に困難さがあるLD児の場合、ものの位置関係をうまくとらえることができません。

そのため、

- 鏡文字になる。
- 書いたとき、線や点が足りなかったり、多かたりする。
- 写生や図形の模写ができにくい。

など、正確に書いたり写したりすることが難しくなります。

また、このことは、目と手の協応動作⁷にも関係し、

- 文字がばらばらになってしまう。
- 文字のバランスが悪い。

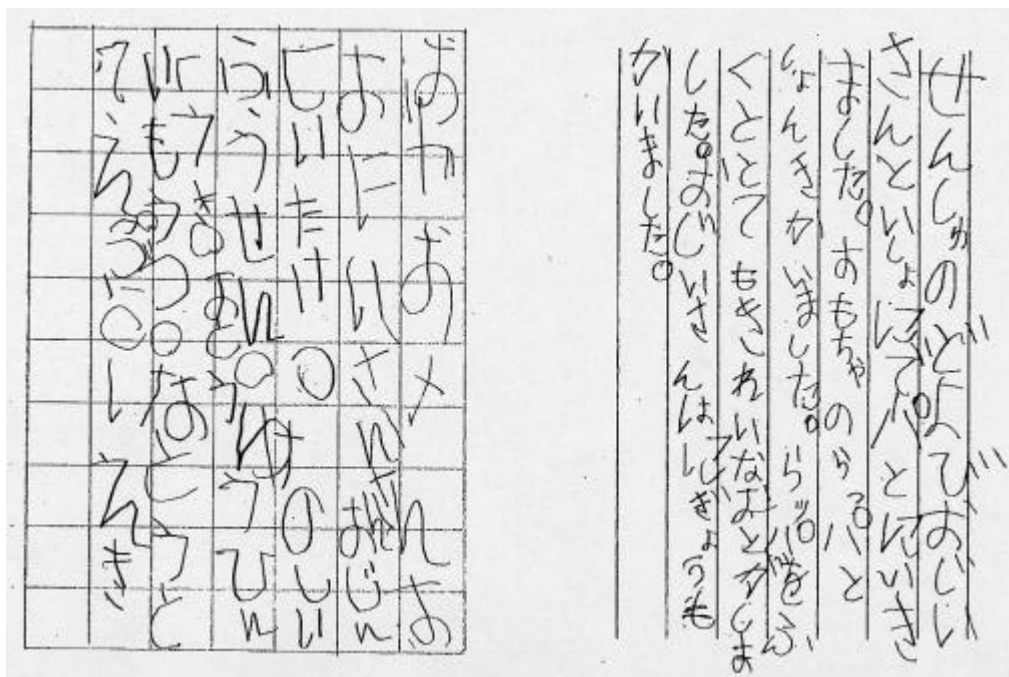
などの様子もみられます。

これらはすべて、視覚認知と空間認知の困難さから生じるつまずきなのです。

6 空間認知...視・聴覚や身体感覚で、前後・左右・奥行きなどの位置関係や方向、大小などの空間的な関係をとらえること。

7 協応動作...目と手、目と足、口と手など、それぞれの器官や身体部位が機能を発揮しながら総合的に適切な行動をすること。

LD児のノートの例



次に、「バランスが悪くて、ほとんど読めない文字を書く」子どもに対する支援のポイントをあげてみましょう。

直線や曲線のある具体物のふちどりをさせながら、目でスムーズに追うことができるようにしましょう。

字の左右、上下、線の長短や形の構成などの違いを意識させましょう。

始筆と終筆の位置を確認してから書かせましょう。

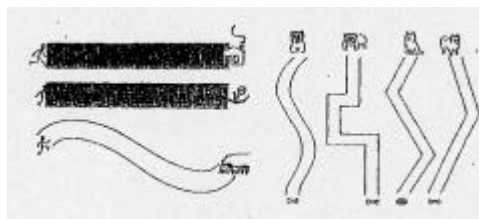
ノートのマス目や行を大きくして、はみ出しにくくしましょう。

すきないろをぬりましょう。

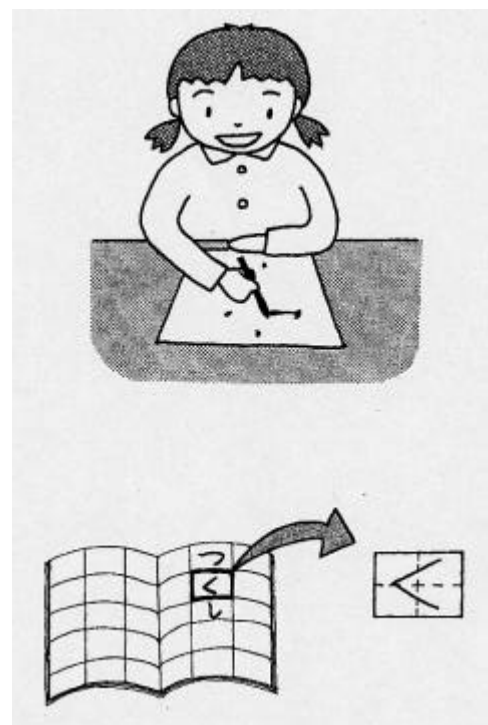
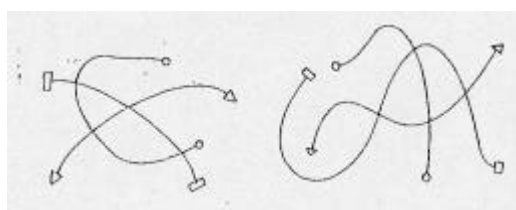


マスの中や行の中心に線を入れて、文字の中心を意識させるようにしましょう。

はみださないようにせんをひきましょう。



せんのうえをなぞりましょう。



(5) 「計算する」ことをつまづき

筆算で桁を間違えたり、くり上がりやくり下がりでつまづいたりする子どもの中に、視覚認知や空間認知に弱さがある場合があります。また、**短期記憶**⁸の弱さが関係している場合もあります。

8 短期記憶...目や耳から入ってくる情報を、数秒から十数秒間記憶すること。

計算におけるつまづき例

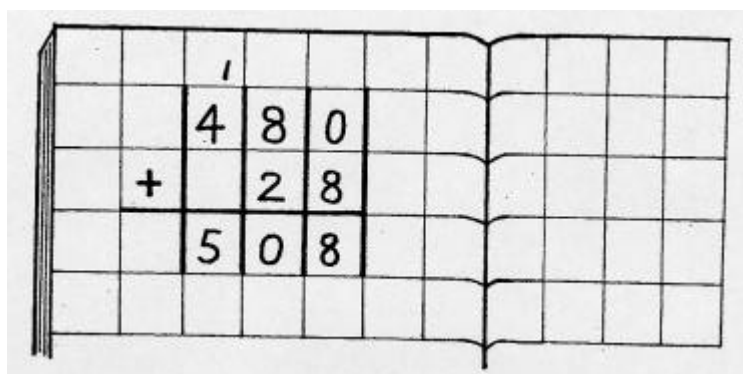
The image shows two handwritten arithmetic problems. The first is a subtraction problem: $38 - 42$. The numbers are misaligned, with the 8 and 2 in the same column, and the result is written as 532. The second is an addition problem: $480 + 28$. The numbers are misaligned, with the 8 and 8 in the same column, and the result is written as 5080.

次に、「筆算の桁をずらして計算する」子どもに対する支援のポイントをあげてみましょう。

マス目の入ったノートを用意しましょう。

縦の線を入れ、桁をそろえやすいように工夫しましょう。

1枚のプリントの問題数を少なくし、文字を大きくしたり、行間を広げたりしましょう。



(6) 「推論する」ことにつまずき

推論する力が弱いと、図形や応用問題の理解、読解力や表現力などにつまずきがみられます。

例えば、

- 空間の位置関係や奥行き、方向などが分かりにくかったり、**図と地**⁹の区別ができにくかったりするので、図形や文字を正しくとらえられない。
- 文章題で内容を整理したり、イメージ化してまとめたりすることができにくい。

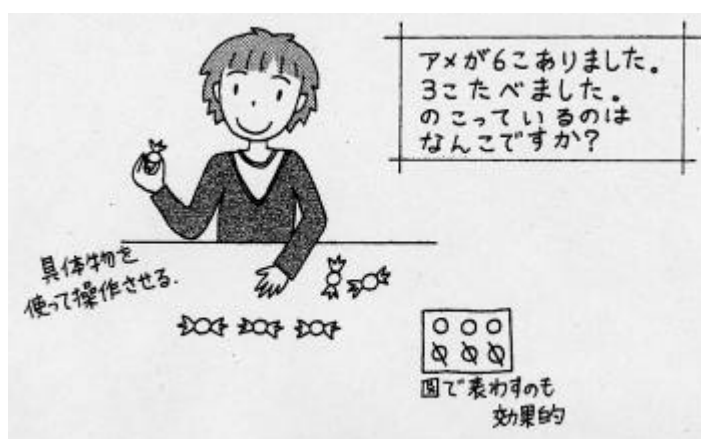
などの様子がみられます。

9 図と地...目で見えて形として浮かび上がって見えるものを**図**といい、その背景として知覚されるものを**地**という。

次に、「計算はできるのに、文章題が解けない」子どもに対する支援のポイントをあげてみましょう。

キーワードに注目させ、必要な部分に線を引かせたり、丸で囲ませたりしましょう。

問題文を絵や図に表すなどの工夫をして、イメージ化を図りましょう。



(7) 「社会性」のつまずき

私たちはみんなと一緒に話をしたり、行動するときには、表情やしぐさなどから相手の意図や今の自分の状況を判断したりして、その場に合った会話やかかわりをしています。しかし、LD児の場合は、

- 相手がどう思っているのかを理解できない。
- その場の雰囲気がい分からず、場違いな発言をしたり、場にそぐわない動き方をしたりしてしまう。
- 冗談が通じず、すぐにおこってしまう。

などの様子がみられます。

また、

- あいさつをする。
- 礼を言う。
- 謝る。

など、社会生活を送るための基本的なスキルが身に付かない場合もよくみられます。



次に、「友達の感情や気持ちを考えずに、自分のペースで行動する」子どもに対する支援のポイントをあげてみましょう。

絵カードや写真、ビデオなどで、相手の表情、口調などの違いに気付かせましょう。

相手と協力してする活動を多く取り入れましょう。

- ・二人で給食を運ぶ
- ・二人三脚で歩く など

対人関係でのトラブルと似た状況を設定し、ロールプレイ¹⁰ (Role play) をさせた後、お互いにどんな気持ちになったかを話させましょう。

10 ロールプレイ... 役割演技。ある場面である役割を仮定し、言葉と身振りを通して自発的に役割を演ずること。

(8) 「運動」のつまずき

身体に障害はないのに、運動をさせると「不器用」な状態を示す子どもがいます。これは、自分の身体のイメージや動かし方が分かりにくく、どの部位をどう動かせば、どんな動きになるかをとらえる力が弱いと考えられます。

そのため、

- 手足の動きがどこかぎこちない。
- なわとびやボール運動が苦手である。
- 手先を使った細かい作業が苦手である。

などの様子がみられます。



次に、「身体の動きがぎこちない」子どもに対する支援のポイントをあげてみましょう。

フープや輪にしたロープの中をくぐり抜けたり、風船を身体のいろいろな部位を使って落とさないように運んだりできるようにしましょう。

平均台やロープの上をはみ出さないように歩いたり、トランポリンで前後左右にいろいろな方法で跳んだりできるようにしましょう。

固定遊具の種類や配置を工夫したり、音楽を利用したりして、子どもが動きたくなるような運動環境をつくりましょう。

LD児への支援や

LD児は本人の状態が正しく理解されないと、情緒が不安定になったり、不登校になったりすることがあります。このような二次障害の状態にならないために、**セルフエスティーム**¹¹ (Self-esteem) を高めるとともに、周囲の環境に対して工夫や配慮をすることが大切です。

(1) 本人に対する支援や配慮

自信をもたせる

- 得意な面を認め、それを伸ばすことによって「やればできる」という気持ちを育てましょう。

成就感をもたせる

- 本人のできることから始めましょう。
- 少しでもできればほめましょう。

主体性・自立性を高める

- 本人に考えさせ、判断させましょう。
- 目標を立てさせ、やり遂げるように支援しましょう。

見通しをもたせる

- 学習（活動）の手順や本人のめあてを、必要に応じて確認させましょう。

11 セルフエスティーム ... 自己有能感、自尊感情。性格・長所・障害・特技・外見など、自分のすべての要素をもとにつくられる自己イメージに対して、自分の価値を評価し自分を大切にしようと思う気持ち。



配慮について

(2) 周囲の環境に対する工夫や配慮

学習環境を整える

- 机の上や身の回りの整理・整頓とんの仕方に配慮しましょう。
- 掲示物や教材の整理をし、余分な刺激を減らしましょう。
- 周囲の景色や雑音に影響されない座席の位置を工夫しましょう。

周囲の友達との理解と協力を促す

- 個別の支援や配慮が「特別扱い」でないことを理解させましょう。
- 一人一人の個性や違いを認め合える学級づくりをしましょう。
- LD児に対する適切なかかわり方を指導しましょう。

家庭と協力する

- 保護者が率直に子どものことを相談できる人間関係を大切にしましょう。
- 家庭でのかかわり方について、できるだけ具体的に知らせ、協力を求めましょう。

学校全体で支える

- 担任のみに指導を任せず、学校全体で取り組みましょう。
- 校内研修会や教育相談などで、子どもがつまづいている点について共通理解を深めましょう。

専門機関などとの連携を図る

- 校内の教師の協力体制だけでは指導が不十分な場合、医療機関や相談機関との連携を図りましょう。